

Title	ボランティア教育における組織社会化過程の分析 : 「役割」としての正統的周辺参加
Author(s)	日高, 正樹
Citation	年報人間科学. 2022, 43, p. 57-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86459
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈論文〉

ボランティア教育における組織社会化過程の分析
——「役割」としての正統的周辺参加

日高 正樹

論文要旨

本稿は、NPOなどで大学生ボランティアに対して行われる研修や活動を教育として捉え、そこで行われる組織社会化の過程を正統的周辺参加（以下、LPP）の観点から明らかにするものである。先行研究ではNPOの会員などコーディネーターからの支援の重要性が示唆されていたものの、経験年数の増加とともにボランティアの内省が深まるとされ、参加の過程を考慮した研究に乏しかった。本稿では、参加の位相として「役割」に注目し、経験年数が増えても役割が変わらないケースも分析対象とするため、計量テキスト分析を用いてボランティアの内省を分析した。結果としては、内省を促すために組織が提供する価値観を内面化し、ボランティア対象への言及が増える様子が確認された。しかし、それは経験年数とともに役割が変化するものだけにみられ、経験年数が長くとも役割が変化しないものには組織社会化がみられなかった。これはいわばボランティアに“なる”プロセスとボランティアに“ならない”プロセスともいえる。後者は、LPPにおける所属の3つのモードでいえば、相互作業への「従事」のみがみられ、実践を通じてイメージを作る「想像」や他者と自らの価値を合わせる「整合」の過程がみられなかった。今後の課題として、組織の提供する価値観とボランティアの間で生じるコンフリクトに注目し、教育としてのボランティアの実践における相互行為をより明らかにする必要がある。

キーワード

正統的周辺参加, ボランティア, 組織社会化, 役割, 計量テキスト分析

1. 教育としての「ボランティア」

本稿は、社会教育団体に参加する大学生が行うボランティア活動を「学校外教育」として捉え、そこで行われる社会化の様相を読み取る試みである。

近年、ボランティア活動を、ボランティアの「教育／学習」という概念でとらえる視点が多くみられる。ボランティアに関する言説分析を行った中山（2007）は、従来、福祉領域でよく見られたボランティアが、1990年代になると他領域化の流れで社会教育にも含まれるようになり、さらにボランティア概念に「自己成長」を重視する文脈が出現したと述べている。この流れは、学校教育においても同様である。ボランティア学習を体系的にまとめた長沼（2008）によれば、学生がボランティア活動の経験を学校の授業内容と連結させて学習効果を高め、責任ある社会人を育てることを目的とする「サービス・ラーニング」が学校教育において幅広く展開されているという。学校／学校外の区別にこだわらずとも、比較的余暇時間

のある学生がボランティアの主体として想定されることはよくあることであり、そこに教育的意義や自己効用的意義を見出す傾向があることは広く認識されているといえるだろう。

一方、こうした「教育」や「自己成長」の文脈がボランティアに付与されることに対する危惧を表明する向きもある。たとえば、仁平（2011）においては、「やりがい」や「自己成長」を重視するボランティアの活動を自己効用的ボランティア論と称し、ボランティア対象となる「他者」がいないことを批判している。

こうした議論は、「ボランティアーボランティア対象者」という2者関係において検討されることが多いが、先に述べたボランティア教育の制度化（学校化）やNPOなどボランティア活動を主催する団体の台頭に伴い、別の関係性からも検討する必要性がある。それは、ボランティアを教育する主体を視野に入れた「教育者（主催者など）ー被教育者（ボランティア）」の関係性である。この場合における教育者とは、サービス・ラーニングの文脈でいえば授業担当教員や外部講師であり、NPOの活動においては取りまとめる主催者であり、ボランティア団体内で階層的な役割分担がみられるのであれば、上位成員などが想定される。この関係性を実証的に研究した木村・河井（2012）は、面接および質問紙調査を用いて、高等教育におけるサービス・ラーニングの経験と学習成果の類型化および関連を明らかにした。そこでは、経験として見出された領域の一つである「他者との関わり」の中でも、「教員やコーディネーターからの支援」因子が、ボランティアの学習成果に対して「全体として高い効果を持つ」（木村・河井 2012: 235）と結論付けられている。（同様の知見はHatcher（1997）でも示唆されている。）上述した研究は学校教育としてのサービス・ラーニングを対象としているが、支援因子の効果は、NPOが主催するボランティア活動など、学校外における「教育」の営みにおいても同様ののだろうか。これは、言い換えればボランティアはNPOなどの組織の価値観をどう受け入れていくのか、つまり組織社会化されるのかという問いにつながる。

2. 先行研究と本稿の着眼点

2.1 内省を通じた社会化

では、組織的社会化のプロセスを把握するうえで、何に注目すべきか。ボランティア活動を通じた教育実践では、ボランティアの「体験」を意味づけし、学びと結びつけるための方法として「内省（省察、振り返り）」が重視されている。この概念は、「ボランティア活動自体が常に内省を含んだもの」（長沼 2008: 238）と言われ、「SL（サービスマーケティング）の欠かせない要素」（村上 2012: 10）と述べられるほど、教育的仕掛けとして意義を持つ。本稿でも、参加者の内省に注目し、いかなる価値が内面化されているかについて分析する。なお、内省の内容に関して、学校教育の一部（サービス・ラーニング）として捉えるのであれば、授業内容の理解が重要とされるだろう。あるいは長沼（2008）によると、「自己」「他者」「社会」に対する理解の促進や、「自主性・主体性の涵養」が多くの研究では共通に見られるという。今回注目する学校外の実践においても、こうした傾向は共通している。（落合 2007etc）そして、後述する本稿の研究手法を用いた分析では、教育ボランティア（御旅屋・立田 2019）だけでなく、福祉ボランティ

ア(織田ら 2020)でも類似の指摘がなされ、特に「自己」に対する語や「ボランティア対象者」への言及が多くみられることが分かる。

しかし、こうした内省の程度や変化に関する研究は、学年(あるいは経験年数)による変化を認めるにとどまるものや、内省の“多様性”が強調されるものも多い。多様性それ自体は意義ある知見だが、「多様である」ことを前提としたうえで、それ以上に何が言えるのだろうか。そして、経験年数が変化を促すという素朴な認識は、学校教育における学力の議論に置き換えれば、「学年が上がるごとに学力が身につく」と述べているに等しいが、この説明はどれほど説得力を持つのであろうか。

2.2 正統的周辺参加と機能不全

この問いに答えるための枠組みとして、Lave & Wenger (1991=1993)の「正統的周辺参加(Legitimate Peripheral Participation: LPP)」に注目したい。正統的周辺参加とは、徒弟制の研究において、職人見習いは学校的な教授関係(知識の伝達)によらずに、どうやって技を習得できているかという点に着目して、従来とは異なる学習観を提示したものである。つまり、特定の実践をする共同体(実践コミュニティ)への新規参加者(見習い)が、共同体内での活動を許される(正統性を持つ)ことで、周辺の活動に参加することが可能となる。そうして共同で様々な実践に取り組む過程を、一種の学習とみるのである。この周辺の参加は後の十全的参加(full participation)へとつながり、その過程で熟練者(親方)になっていく。さらに、「学習を、意味を獲得する参加の軌道の中で捉える」として、共同体内の相互作用で意味(meaning)が相互に構築され、かつそれらが個人のアイデンティティ形成に影響するとしている。

この理論をボランティアの組織社会化に当てはめると、参加の位相の変化が学習の変化となる。なお、正統的周辺参加においては、「教授行為へのアクセスではなく、学習の資源としての実践へのアクセス」(Lave & Wenger 1991=1993: 68)が重視されている。つまり、学年や経験年数が実践への関わりを変えて参加が変化すると学習が促進されるが、単に経験年数を重ねただけで参加の位相に変化がなければ、学習は促進されないことになる。本稿ではこの「学習が促進されない事例」についても注目したい。従来の研究ではボランティアの積極的な変化をとらえる研究が多かったが、より厚みのある実態把握のためには、田中(2011)が「失敗事例の分析(その条件の解明)」を課題として挙げるように、機能不全に陥ったボランティアについても明らかにする必要がある。

言い換えれば、参加の位相の変化を探る中で、誰が意味を獲得し、誰が獲得しないかを明らかにすることであるが、この点に関しては、Wenger (1998)の「所属の3つのモード」を参考にする。Wenger (1998)によると、組織への所属は、相互作業への「従事(engagement)」、実践を通じてイメージを作る「想像(imagination)」、事業や価値観、他者の行動や考えに自らを合わせる「整合(alignment)」という3つのモードからなるという。そして、所属のモードを通じてアイデンティティが本質的になる「同一化(identification)」が進行するだけでなく、対になるプロセスとして意味を積極的に解釈して方向性を定めていく「交渉可能性(negotiability)」という過程も見られるという。このモードのいずれかが進まないことで、機能不全状態のボランティアが発生すると考えられる。こうした参加の位相変化は、何によって促

進されない（あるいは促進される）のだろうか。

2.3 「役割」への注目

参加の位相を変化させる要因を考えるうえで、正統的周辺参加としてのボランティアを教育社会的に考察しているKathia (2020)を参考にする。Kathia (2020)は、ドイツの「国家ボランティアサービス (Bundesfreiwilligendienst)」に登録された医療ボランティアの学習経験について研究している。そこで描かれているのは、医療従事者によって活動が制限されているボランティアスタッフが、他の医療従事者との相互行為を通じて、従来は許されていなかった「役割」が付与され、参加（学習）を進めていく様子である。本稿も同様に、参加を促進させる要因として、何をするか、という役割に注目したい。Kathia (2020)では、役割をインフォーマルに交渉する過程を分析しているが、本稿のように社会化されない存在に注目するためには、役割が明確に規定されている方が、内省を分析するうえでは比較しやすい。つまり、ボランティアの内省に対して、経験年数と役割の観点から比較することで、誰が組織社会化を促されており、誰が促されていないかを明らかにするのである。

本稿の関心をまとめると以下になる。まず、ボランティア活動を通じた教育により、ボランティア活動の担い手は内省をどのように変化させるかに着目する。そのうえで、「変化しない人」にも注目する。誰が変化しないかに関していえば、経験年数よりも役割の変化に注目し、経験年数が変化しても、役割が変化しなければ参加は促進されず、組織社会化は起きないのではないかという仮説を立てる。

3. 対象と方法

3.1 対象

上述した論点を明らかにするため、調査対象団体には、内省を促進させる教育的仕掛けや役割などが明確に体系化されている組織を選出した。具体的には、広島県尾道市にある社会教育NPO法人「おのみち寺子屋」であり、そのNPOが主催する各種事業に参加する大学生ボランティアの内省を分析する。当該団体は青少年に対して体験事業や学習支援事業を展開するNPO法人であり、そのメイン事業は、夏に小学生100人が4泊5日かけて100km歩きぬく「おのみち100km徒歩の旅」というイベントである。実体験を通じた「生きる力」の育成を目的として2003年から事業が開始され、徒歩の旅以外にも、小中学生を対象にした学習支援事業を実施している¹⁾。そして、これらを支えるボランティアスタッフ（毎年60名前後）が主に大学生を中心として構成されている。

当該団体のユニークな点は、そうした大学生ボランティアスタッフの「人間力」を育成することを名目にした研修を実施している点にあり、年間150時間以上の研修（1日8時間、4～7月は週1回、その他の月は月1回程度）が行われている。事業や研修の運営に関しては、実働としては組織を立ち上げたAさん（NPO代表、50代）が運営しつつ、NPO法人の会員のうち積極的に関与している数名が補助的業務を担っている。これら社会人スタッフは、大学生に対する「教育者」としての側面も有している。具体的な研修の内

容は多岐にわたるが、今回注目するのは、メーリングリスト（以下、ML）を通じたボランティアの内省の共有である。対象団体ではいくつかのMLが展開されており、年間1～2万通のメールが交わされている。本研究で注目するのは、社会人スタッフから特定の訓話的テーマが提示され、それに大学生ボランティアスタッフが意見を述べるML（訓話的ML）である。具体例は後ほど紹介するが、このMLのように、テーマに基づいて自由に考えたことを発信するという事は、言い換えれば電子空間上に実践コミュニティが存在しており、そこで自らの経験や今後の活動について「意味」を構築していくのである。そうみると、MLという場合は松本（2019）が実践コミュニティについて言及した通り「共謀関係を持つ人々によって意味システムとしての世界観が練り上げられるような社会的装置」であり、その中で諸個人はアイデンティティを形成していくのである。

本稿の関心は社会化の有無を明らかにすることであるが、そのためには、これらMLをすべて質的に解釈するというより、重要な表現に注目したうえで計量的な分析を適宜取り入れる方が、各人の差異をはっきり読み取れるように思うため、以下では計量的な手法を採用する点について述べる。

3.2 方法

分析手法としては、計量テキスト分析を採用する。計量テキスト分析とは、内容分析（content analysis）の知見を援用し、川端（1995）などで示された構想を基に、樋口（2014）で分析ソフト（KH Coder）と方法論的視座（接合アプローチ）の提案がなされた分析手法である。文章を語の最小単位である形態素に分解し、その出現頻度や共起関係を図ることで、社会化の有無や変化を明らかにする。

なお、計量テキスト分析においては、内容分析における2つの異なるアプローチの接合が試みられている。Correlationalアプローチでは、文章中によく表れる言葉のグループや、共通する言葉を多く含む文書のグループを、コンピュータを通じた多変量解析によって自動的に発見・分類する方法がとられ、分析者の視点によってデータが汚染されない点にメリットがある。もう一つのDictionary-basedアプローチでは、分類基準（コーディング・ルール）を分析者が作成し、その基準に基づいてコンピュータが文章や言葉を分類・分析するため、曖昧性解消（disambiguation）にメリットがある。

本稿では第一段階の分析において提示されたデータの要約、特に頻出語からデータの傾向をつかむ。続いて、分析対象者の属性情報（経験年数など）を外部変数として追加し、変数ごとの頻出語（関連語）の変化から、正統的周辺参加における参加（学習）の軌跡を見出す。その後、本研究が注目する「人」に関する概念や、探索的に見出した組織社会化の傾向からコーディング・ルールを作成し、より詳細な分析を行う。

4. 分析

4.1 データの概要

メールの取得については、インターネット上からデータを抽出するウェブスクレイピングを行った²⁾。抽出したメールは、2014年から2018年までの5年間のMLログであり、大学生ボランティアの総数は

224名(男性113名,女性111名)であった。メールの送信数や経験年数別の参加人数は表1のとおりである。

表1. 参加人数とメール送信数

対象年度	2014	2015	2016	2017	2018
メール送信数(通)*	2330	2422	2816	2835	2719
各回参加人数(人)**	69	63	86	76	64
経験年数内訳					
0年(辞退)	6	4	15	7	4
1年	26	32	37	33	22
2年	26	14	21	23	23
3年	9	12	8	11	10
4年	2	1	5	2	5

*送信数は、分析対象である訓話的MLのやり取りのみ

**重複(継続参加)を含むため、合計は総人数とは異なる

また、KH Coderの前処理として、削除語・複合語の指定³⁾を行っている。特記すべき注意点として、本研究では、形態素解析の都合上、各学生ボランティアの「名前」は分析対象から除外されているが、社会人スタッフについては、Aさんのみ複合語として指定している⁴⁾。よって、内省が分析におけるすべての関係性を含んでいるわけではない。

メール内容の具体的なイメージをつかむために、以下に一例をあげる。次のメールは、社会人スタッフから大学生に向けて送られたものである。なお、研究対象は大学生の内省であるため、以下の社会人から送信されたテーマとなるメールは計量分析の対象に含まれていない。

【ものの観方・考え方(海とかもめ)】

私の大好きな金子みすゞさんの詩に「海とかもめ」という詩があります。ご存知の方も多いでしょう。

『海は青いとおもってた、かもめは白いと思ってた。

なのに、今見る、この海も、かもめの翅(はね)も、ねずみ色。

みな知ってるとおもってた、けどもそれはうそでした。

空は青いと知ってます、雪は白いと知ってます。

みんな見てます、知ってます、けれどもそれもうそかしら。』

ところで、真夏の炎天下で歩き続ける「100km 徒歩の旅」では、気温の変化が体調に大きく影響をします。昼間の歩行中、子どもたちは身長が低いですから、アスファルトからの輻射熱を私たちおとなよりもたくさん受け取ることになります。同じ気温でも子どもとおとなとは、実際に受ける

温度が違ってくるということですね。それほど気温は上がっていないから水分摂取はそれほど気にしなくても大丈夫！と早合点するのは危険です。常にいろんな角度から物事を観ることが必要になってくるんですよ！

(Aさんのメール。No:29993,ID:1)

これに対し、大学生の返した返信例が以下である。(一部抜粋)

この詩では、海やかもめがちゃんと見てみると違う色をしていたという詩になってます。

昨年の秋かな？ボランティア先で体験した出来事を紹介します。本質を観るということについてです。学習支援の大学生スタッフをしているときに休み時間、男子児童が椅子を床に叩きつけて叫びながら出て行きました。…他の人から話を聴くと、どうやら、やんちゃ坊主がその子にちょっかいをかけてたようです…ケンカになって出てったのかな？誰もがそう思ったと思います。その子と何十分もひたすら何もせず一緒にいるときに、私は、いまこの子が何をおもって黙り込んでいるのか必死に考えました。するとどうやら違うなーと、この子が出してる SOS は、きっと、深刻なものじゃないかと思えました。…お母さんと話すことが出来ました。

「いま、お兄ちゃんが引き籠もっちゃって、家にいる間、あの子にストレスをぶつけているみたいで…他にも、学校でもうまく行ってないみたいで…」

些細なケンカをして出て行ったと思っていた子は、家庭・学校での悩みを抱えて、ひとりですつと背負ってきて、どうにもこうにもならず、爆発してしまったのでは？ということでした。

私たちが夏に出会う子どもたちも。十人十色さまざまな人生を抱えてきてくれます。

この子は良い子。この子はやんちゃ。

一概に言い切ってしまうと、子どもと家族にはなれません。かもめや海と一緒にです。必死に観察して、話を上手に聴いて、根気よく一緒に居続けて子どもを想えばこそ、我が子を真に理解できます。一人ひとりを大切にしてくださいね！

(No:30012,ID:52)

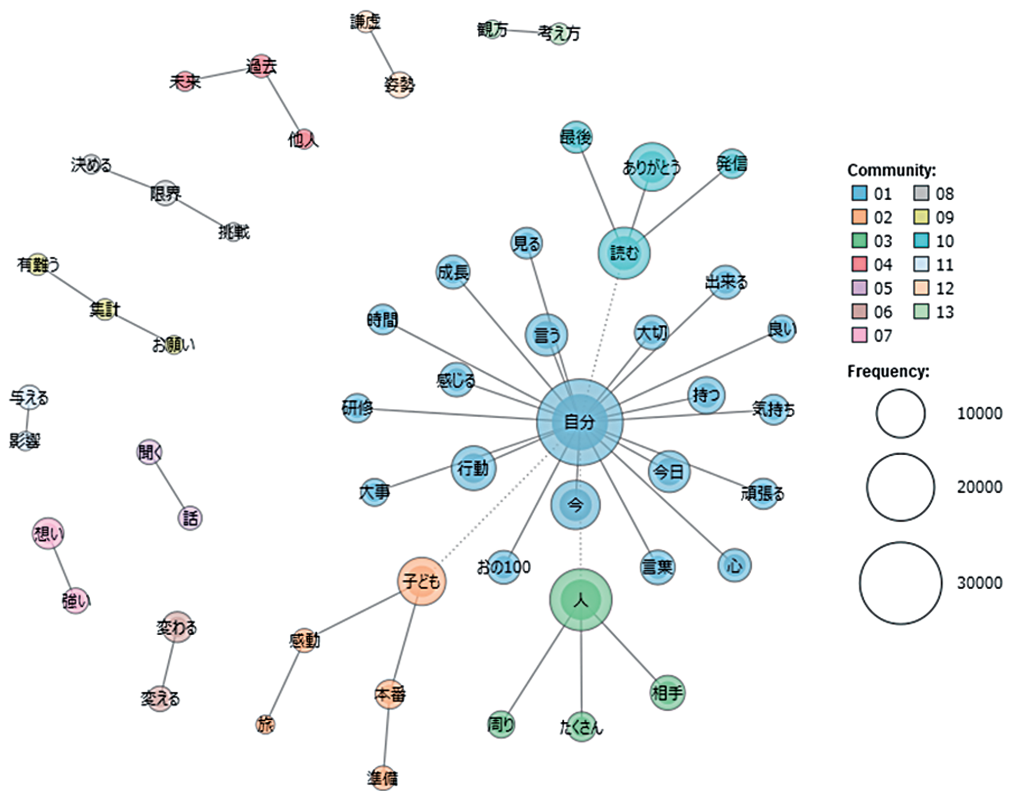
この事例の解釈については後の分析や考察で述べるため、ここでは、明確な教育的意図をもって相互作用が行われていることを確認するとどめる。

4.2 分析①：ボランティア対象者への言及の増加

続いて、形態素分析により抽出された語の概要を検討するために、以下に共起ネットワークを示す(図1)⁵⁾。

図1と併せて頻出語を見てみると、多く出現している語は順に「自分(33,532回)」、「人(16,927回)」、「読む(16,927回)」、「今(10,411回)」、「ありがとう(10,058回)」、「子ども(9,888回)」となる。

図1. 大学生ボランティアの内省を表した共起ネットワーク



これらの語が使用されている文脈を具体的に把握するため、まずは「自分」「子ども」が使用されている文章を見る。

他人が心のスイッチを押すのを手伝えるように、まずは「自分から」「本気」を出すことが大切だと思います。子どもの本気を出させたいなら、まずは学生リーダーの本気からみせましょう！
(No:4051, ID:5)

「自分」の語は送信者個人に関する言及が多く、「子ども」の語はボランティア対象者を指す言葉としてよく使われている。また、「ありがとう」や「読む」に関しては、その語の前後にどのような語が同時に出現していたかを集計するコロケーション統計で確認すると、「ありがとう」が出現する文脈の6割以上で「読む」が出現しており、そのほとんどは「最後まで読んでくださりありがとうございます (No:7415, ID:26)」という文脈である⁶⁾。内省を共有する他のメンバーへの感謝であるが、メールの文末に毎回必ずつける人もおり、相対的に頻度が高くなっている。

図1をより具体的に見ていくと、「自分」を中心としたサブグラフでは、「頑張る」「感じる」「出来る」などの動詞や「成長」などの語句と共に用いられる様子がかがえる。なお、周辺の2,3語からなるサブグラフは、組織内で共有されている価値観や行動指針などの規範的言説である。たとえば、「自分の限界を決めるのではなく(No:2399,ID:5)」や「何が足りないかを謙虚な姿勢で受け止めて、(No:23458,ID:271)」などがあげられる。

また、頻出語上位150語を見てみると、特徴的な点として、「ありがたい」「有難い」などの語彙がみられた。通常、こうした表現は「表記ゆれ」とみなされ、曖昧性解消のために同一概念のコードが割り振られるが、データを質的に解釈する過程で、この違いは組織内で特定の意味付けをうけて区別されているものが見られたため、分けて分析することにした。たとえば、「観る」「聴く」という概念についていえば、単に「見る」「聞く」ではなく、問題意識を持ち、自分の経験にとらわれず、主体的に判断する行為として「観る」「聴く」が定義され、紹介されている。今回計量分析の対象となるMLとは異なるが、主催者からこの点について言及されたものが以下のメールである。(文中「**」は個人名を指す)

しっかり周り(チーム、担当グループ)が観えていますか？

見るのではなく観る！聞くのではなく聴く！

問題意識を持って、心で観ようとしないと、見えているものでも観えなくなります。

ちょっと具体例を出しましょう。皆さんが管理する担当係りの動きについてです。係りMTGの開始や終了時にMLでハウレンソウしていますか？何のためですか？**が私宛に送ってきたので、全体MLで送るように指導しました。問題意識を持って、『このMLを送る目的は何だろう？』と常に考えていれば、係りMTGの開始連絡を全体MLで送ることがベターな場合があるかもしれません。直接の関係者ではないけれど、チームの現在地を知ってもらうために全体MLで送ることが必要かもしれません。送ろうとするMLの先に、どんな場面をイメージして、先方に何を期待しているのか？ただ単に、MLを送ることが目的になっていませんか？

(Aさんのメール。No:23498,ID1)

先に補足説明をすると、当該組織では、実務を担当するフロアメンバーと、特定の実務を管理するリーダー、複数のリーダーを統括するマネジメント層というように役割が明確に階層化されている。上記メールは、ある学生(リーダー層)から会議報告の連絡を受けた主催者が、その報告が直接主催者に上がってきたことに苦言を呈する場面である。前後の文脈も併せて内容を推測するに、「管理」するはずのマネジメント層の学生を飛ばして(つまり階層化された報告・連絡・相談の流れを無視して)主催者に連絡がいき、かつそれが連絡の効率性や周囲の学生のモチベーションアップを考えるとメーリングリストを使った方がよかったのではないかという指導だと思われる。このように、「観る」ことや「聴く」ことに関して、具体例を交えた指導がなされているのである。

本節で明らかになった「子ども」などボランティア対象者への言及や、主催者により「価値が付与され

た言葉」は誰が使っているのだろうか。この点について、次節の分析で検討する。

4.3 分析②：「役割」による内省の変化

前節で見いだされた語と組織内での「役割」や「経験年数」との関係に言及したい。調査団体におけるフロア・リーダー・マネジメント層ごとの特徴語を列挙したのが表2である。なお、表中の数値はJaccard係数を示している。たとえば、フロアメンバーのメール全数中、どの程度の頻度で「読む」という言葉が出現したかを表すのが「.502」であり、フロアメンバーのメールの半数にはこの言葉が出現していることを示している。

表2. 役割ごとの特徴語

フロア		リーダー		マネジメント	
読む	.502	有難う	.135	子ども	.185
ありがとう	.478	自分	.129	自分	.181
最後	.255	子ども	.127	今	.181
集計	.138	持つ	.125	今日	.176
書く	.132	今日	.119	人	.172
考え	.122	人	.119	発信	.169
難しい	.115	出来る	.116	担当	.163
お願い	.095	言う	.115	たくさん	.163
本題	.085	今	.115	行動	.160
意見	.078	最後	.112	感じる	.159

これまでに見た語彙との関係でいえば、最も階層の低いフロアメンバーにおいては、「読む」や「ありがとう」という形式的な感謝に関する語が多く見られ、Jaccard係数から約半数に出現していることがわかる。リーダー層、マネジメント層になると、「自分」や「子ども」に関する言及が増える。当該団体において役割と経験年数はある程度相関しており、経験年数別に見た特徴語においても類似の傾向がみられる。しかし、これを「長くボランティアをすればボランティア対象への言及や自己の内省をよくするようになる」ととらえてもよいのだろうか。

この点に注目するため、対応分析を用いる。対応分析とは、「度数テーブルの行と列の関係を、共通の低次元空間におけるポイントとして、グラフィカルに提示する記述的多変量解析法」(Sten 1998=2016)である。子どもに対する言及や、組織特有の価値観（「観る」など）をコード化して空間上に布置し、経験年数と役割を変数化して座標軸上にプロットすることで、コードと変数の関係を視覚的に把握することができる。

本稿は経験年数ではなく役割に注目するため、経験年数の長い学生のみを対象とし、付与された役割による違いを見ていきたい。経験年数は学部在学中に所属し続けた4年間で最も長く、フロアの役割のみを付与された学生の最長継続年数は3年であった。違いを明確にするため、ずっとフロアメンバーだったもの4名と、マネジメント層となり、かつ当該年度の代表学生であった5名を比較することで、役割の違い

による組織社会化の違いを明らかにする。変数の説明をすると、3年連続フロアメンバーの人物には「F」を用い、最終年度がマネジメント層の学生には「M」を付与している。後の数字（1～4）は経験年数であり、小文字（a-i）は個人を指す。まとめたものが表3である。

表3. 各期代表学生（M）と3年フロア学生（F）の変数の説明

付与変数	説明	人物名	継続年数	対応分析で布置される変数
M	代表学生 2014年度	aさん	4年間	M4 a
	2015年度	bさん	4年間	M3b M4b
	2016年度	cさん	4年間	M2 c M3c M4 c
	2017年度	dさん	3年間	M1 d M2 d M3d
	2018年度	eさん	4年間	M1e M2e M3e M4e
F	3年連続フロア学生	fさん	3年間	F1f F2f F3f
		gさん	3年間	F1g F2g F3g
		hさん	3年間	F1h F2h F3h
		iさん	3年間	F1i F2i F3i

分析に用いる語については、ボランティア対象者を含めた人に関する用語と、前述した「観る」のように特定の価値が付与された言葉を使用した。なお、人に関する語については、曖昧性解消のため同義語をコード化している。結果が図2である。

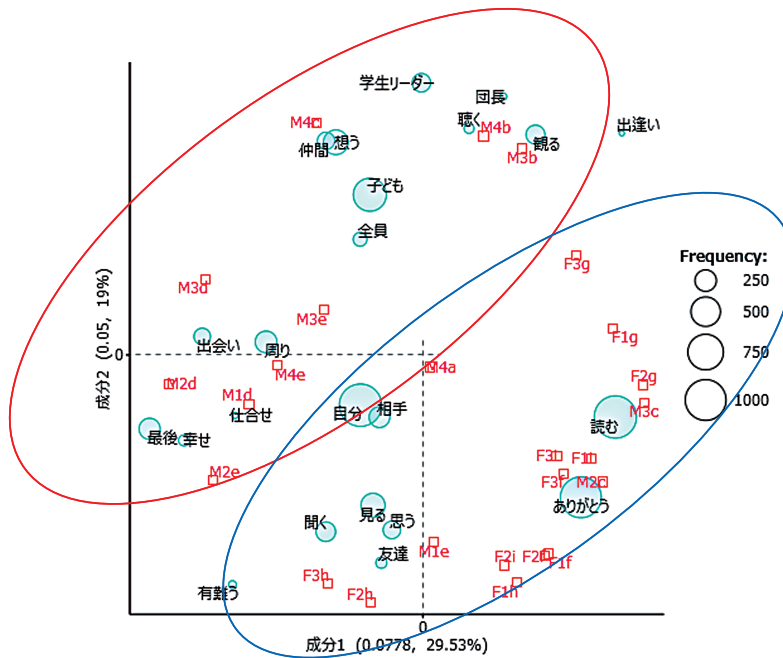


図2. 組織社会化に関する語×特徴的な学生（M・F）の対応分析

一見すると難解に見えるが、シンプルな結果を示した図となった。表中の青色・赤色の囲みは著者が追加したものであるが、中心から見て青囲みの方向には価値が付与されていない「一般的な語」が多く、赤囲みの方向には「価値が付与された語」や「ボランティア活動にかかわる人物（学生リーダー、子ども、など）」が見られる。変数の布置を見ると、青色で囲った方向にすべてのフロアメンバーが集中しており、「読んでくれてありがとう」などの形式的感謝に関する表現がよく見られる。一方、ほとんどのマネジメント層は赤色で囲った方向に集中しており、そこではボランティア対象である子どもへの言及などが特徴的にみられる。

また、この対応分析を用いて、ボランティアの参加の軌道をたどりたい。3年連続フロアの学生は、基本的には青の方向のみにかたまって見られ、経年変化があまり見られない。マネジメント層の学生においては、最初から赤の方向に布置される人もいれば、cさんのように、2,3年目は青の方向の布置（「ありがとう」と「読む」への言及）だったものが、マネジメント層についた4年目に赤の方向（「仲間」「想う」などの言及）へと変化する人も見られる。ここから、フロアメンバーにおいては継続年数が増えても組織的社会的な社会化の様子が見られず、子どもや組織の提供する価値にあまりコミットしない様子がうかがえる。そして、マネジメント層に至る学生は、経験年数が浅くとも当初から子どもに言及しつつ組織の提供する価値を積極的に取り入れているか、あるいはマネジメントになる年には変化しているということが言える。

分析の結果をまとめると、以下の知見が得られた。まず、先行研究に見られるように、自己の内省やボランティア対象に関する語が多く出現し、それは経験年数や役割に応じて使用される頻度が多くなる。一方で、経験年数が長くとも、役割がフロアメンバーのままの学生はボランティア対象や組織の提供する価値に言及する機会は少なく、一般的な表現や形式的な感謝を述べる傾向にある。対して、経験年数の長いマネジメント層の学生はボランティア対象や組織の提供する価値を積極的に取り入れるが、それは経験年数の浅い時から一貫してコミットする学生もいれば、年次を重ねて変化を見せる学生もあり、その変化は一樣ではない。

5. 考察と結論

5.1 「役割」を通じた正統的周辺参加

まず、今回示唆された役割の重要性について考えたい。調査団体において、階層化された役割によって参加する会議や受け取るメールの内容も異なるため、役割はすなわち参加の程度を示し、役割を付与される行為は、十全的参加への必要条件ともいえる。Kathia (2020) の医療ボランティアにおいては、役割の境界を乗り越えるためのインフォーマルな実践に焦点が当てられていたが、ボランティアを教育ととらえる対象団体では、「私はどう考える」という内省をフォーマルに共有することが重視され、それを参考に役割が付与される。

ここで重要なのは、組織的社会的な社会化は「組織に所属している」という経験年数では活性化されず、十全的参加に近づくのは難しいということである。そこに「いる」だけでは十全的参加になり得ないのであり、

何らかの意味の交渉を経て、実態としての役割付与や内面としての組織的社会化を経るという相互行為を組織内において繰り返すことが、十全の参加につながるのである。その結果、「子ども」をどう「観る」か、という内省が進み、ボランティア対象への認識が深化すると考えられる。「観る」というのは内省を促す視点であり、木村・河村（2012）で述べられた教員やファシリテーターの重要性を示唆する研究と整合的である。

5.2 「従事」はするが、「想像」しない人々の存在

これを所属の3つのモードで考えたい。相互作業への「従事」はメールの送信を通じて誰にでも開かれている。実践を通じてイメージを作る「想像」は、参加の位相が変わるにつれて、“自己”や“子ども”への言及が増えるようになっていく。しかし、単純な「経験年数」が効果的に働くわけではない。単に「いる」だけでは参加の位相が変わらず、役割などが明確に示すように、自分が「何であるか」が問われるのである。その後、事業や価値観、他者の行動や考えに自らを合わせる「整合」として組織の価値観の内面化を通じた「同一化」に成功すると、自らのアイデンティティはより本質的になる。計量的にもっとも端緒に表れるのはボランティア対象としての“子ども”への言及であり、質的に解釈すると、主催者からの声掛けを通じて内省が行われている様子が見られる。たとえば、「海とかもめ」で紹介した学生の文章中にも、「観る」という表現がみられたが、これも代表学生（M）のメールである。「子どもを観る」ことに関して自らの具体的な体験を提示しつつ、主催者の意図を理解したうえで他の学生への影響も考慮したMLであり、こうした相互行為が組織社会化を促進するのだといえる。この過程は言い換えれば「ボランティアに“なる”プロセスだといえよう。こうした存在は、組織に自己を「同一化」させるだけでなく、提示された価値観に対して「交渉可能性」を発揮し、組織を再構成する力も持ちうる。

一方、ボランティア対象者を含めた他者への言及が増えず、組織の提示する価値を内面化するわけではない人々も確認された。年数を経て、役割の変化とともに組織社会化や他者への語彙が豊かになる人はいるが、役割が変わらない人で語彙に変化がみられた人は今回確認されなかった。所属の3つのモードでいえば、相互作業への「従事」のみが成立しており、実践を通じてイメージを作る「想像」や、他者と自らの「整合」を図る様子があまり見られない可能性が考えられる。3年連続フロアメンバー（F）の人たちのMLには、ほぼ具体例が登場しない。「観る」という字が使用されていても、なぜそこで使う必要があったかわからないものが大半か、あるいは主催者からのメール内容を抽象的に言い換えるだけのものであった。この過程は、参加しつつも「ボランティアに“ならない”」プロセスである。

5.3 まとめと課題

本稿で明らかとなった知見をまとめると以下のようなになる。ボランティアの内省においては、組織社会化の過程で、組織が提供する価値を内面化しつつ相乗効果的にボランティア対象への認識が深まる様子が確認された。しかし、経験年数が長くとも役割に変化がない人は、組織の提供する価値を形式的に受け取る傾向から認識が深まらない結果、所属のモードでいう「想像」と「整合」の過程が起きないと考えられる。

課題としては、提示された価値観を用いてどのような意味の交渉が行われているかを、特に大学生ボランティアがどう積極的に行っているかまで明らかにすることはできなかったことがあげられる。正統的周辺参加におけるアイデンティティ形成は、個体主義的な学習観ではなく、実践を相互構成的にとらえる概念である。「交渉可能性」など積極的な意味構築主体として大学生ボランティアをとらえることは、教育者から一方的に価値を伝達され、社会集団の安定的維持に寄与するだけの存在として被教育者をとらえる過剰社会化言説を乗り越える可能性を持つ。ただし、主催者と大学生ボランティアの間には役割付与をはじめとして権力関係が存在し、そこにはなるべきボランティア像や理想的な教育像がある以上、一定のコンフリクトが想定されるのである。加えて、このコンフリクトは、組織に参加する人すべてに生じているはずである。ボランティアに“なる”人にも、“ならない”人にも、組織の価値観に対して意味の交渉を迫際のコンフリクトや、価値にコミットしないがゆえに機能不全とみなされる際のコンフリクトが存在するはずだ。よりいえば、コンフリクトを抱えた際に、どのような意味交渉を行うか、あるいは所属しながら活動に参加しない「不参加の参加」(Lave & Wenger 1991=1993)を行うのかはいまだ不明である。特に、ボランティアに“ならない”人々について、彼らはなぜ所属し続けるのか、何に葛藤し、何を求め得ていると認識しているのかに関して、実証的に研究する必要がある。ボランティアの教育社会学的研究をより深みのあるものにするために、こうした点に注目しつつ、多様な調査手法を用いて実態を明らかにしていきたい。

文献

- [1] 織田杏里・松島生幸・稲垣応顕, 2020, 「ボランティアスタッフにおける自己変容への意識に関する一考察——子ども食堂での福祉実践を通して」『上越教育大学研究紀要』40(1): 23-32.
- [2] 御旅屋達・立田瑞穂, 2019, 「教育現場体験における大学生の立場性の検討」『山口学芸研究』(10): 37-51.
- [3] 落合知子, 2007, 「多文化共生のための媒介力——NPOによるニューカマー支援に携わるボランティアに関する研究」『多文化関係学』4: 15-32.
- [4] Kathia, V S, 2020, “Informal learning in formal organizations: The case of volunteer learning in the hospital” *Current Sociology*, 68(4): 572-591.
- [5] 川端亮, 1995, 「パソコンによるテキストデータの内容分析」『ソシオロジ』42(1): 97-103.
- [6] 木村充・河井亨, 2012, 「サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究——立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として」『日本教育工学会論文誌』36(3): 227-238.
- [7] Sten, E C, 1998, *Applied correspondence analysis : an introduction*, New York: SAGE Publications. (藤本一男訳, 2016, 『対応分析入門——原理から応用まで——解説・Rで検算しながら理解する』オーム社.)
- [8] 田中雅文, 2011, 『ボランティア活動とおとなの学び——自己と社会の循環的發展ボランティア体験の教育力』学文社.
- [9] 長沼豊, 2008, 『新しいボランティア学習の創造』ミネルヴァ書房.
- [10] 中山淳雄, 2007, 『ボランティア社会の誕生——欺瞞を感じるからくり』三重大学出版会.
- [11] 仁平典宏, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.
- [12] Hatcher J A and R G Bringle, 1997, “Reflection : Bridging the Gap between Service and Learning,” *College Teaching*, 45(4): 153-158
- [13] 樋口耕一, 2004, 「テキスト型データの計量分析——2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1): 101-115.

- [14] 松本雄一, 2019, 『実践共同体の学習』白桃書房.
- [15] 村上徹也, 2012, 「サービスマーケティングにおけるリフレクション研究の到達点」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』20(0): 8-18.
- [16] Lave, J and E Wenger, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, England: Cambridge University Press. (佐伯胖訳, 1993, 『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書.)
- [17] Wenger, E, 1998, *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*, England: Cambridge University Press.

注

- 1) COVID-19により、2020年度、2021年度の“徒歩の旅”事業は中止となり、学習支援は大幅に縮小された。その影響で学生数も減少傾向にあるが、大学生への研修は継続的に実施されている。
- 2) 具体的には、Googleが提供するプログラミング言語であるGAS (Google Apps Script) を用いて、Gmailアプリから取得した。データクレンジングとして、送信者の署名やML機能を提供する会社による広告など分析結果をゆがめかねない不要情報は除いている。
- 3) 削除語の指定方針は、一度形態素に分けたデータから抽出語150語を見出し、解釈不可能な記号(たとえば顔文字など)や、解釈を要しない一般的な表現(たとえば「こんにちは」などの挨拶)を削除している。また、具体的な「大学・学科名」も一括削除した。複合語に関しては、KH Coderの複合語検索機能を用いて抽出された上位200語を参照し、「別々の形態素として考えた場合と、2つの形態素を合わせた場合で意味の異なる語」(たとえば、「学生」「リーダー」「係り」の3語の関係において「学生リーダー」と「係りリーダー」は職位が異なる場合)を中心に複合語として指定した。
- 4) 人名に関して、調査団体では“あだ名”を使用しており、他の用語との区別をつけることができなかつたためである。
- 5) この図では大枠を示すことを目的とするため、用いる語が150語となるよう調整し、出現する共起関係も150に設定している。ただし、そのままでは共起関係が複雑で視覚的解釈に適さないため、表示は、相対的に強い共起関係のみ示した最小スパンニングツリー設定を行っている。最小スパンニングツリーとは、グラフ理論において、グラフの連結を保てる最小コストで構成された閉路のない(つまり冗長でない)ネットワークのことである。上記「相対的に強い」の意味は、以下のURLに詳しい。http://koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=903&mode=allread
なお、図において結果的に表示されているノード(語)、エッジ(線)、密度は、N:54,E:44,D:0.31である
- 6) 計量テキスト分析の強みの一つは語や共起を“計る”ことで、客観性を一定程度担保できる点にある。しかし、本研究は日常的な内省を対象とするため、社会調査の質問紙調査における自由回答記述などに比べて、文脈が多様である。よって、「語」のニュアンスについて言及する場合は、必ずコロケーション統計で解釈の大意にずれがないか確認し、可能な限り多くの原文を確認している。ただし、後述する「観る」のように、文脈が一定でないという点について分析しているものもあるが、本文中でその旨述べている。

The Process of Organizational Socialization in Volunteer Education: The Importance of “Role” as Legitimate Peripheral Participation

Masaki HIDAHA

Abstract:

This paper describes the process of organizational socialization from the perspective of legitimate peripheral participation (LPP), considering the training and activities provided to university student volunteers by Nonprofit Organization (NPO) as a kind of education. Previous studies have pointed out the importance of support from coordinators such as NPO members, and it is believed that volunteers deepen their self-reflection as their years of experience increase. However, this study focuses on “role” rather than years of experience. In other words, the focus is on volunteers whose roles did not change while their years of experience increased. Their reflection texts are examined using quantitative text analysis.

The results show that volunteers internalized the organization’s values to promote self-reflection, and the number of references they made to volunteer subjects increased over time. At the same time, these effects are only found in individuals who have years of experience and changes in their roles. Those who have years of experience but no change in their roles have not been organizationally socialized. Thus, two processes are observed: “becoming” a volunteer and “not becoming” one. In the latter, the findings of the three modes of LPP are different. Only the process of “engagement” (mutual working) is observed, and the processes of “imagination” (creating images through practice) and “alignment” (integrating one’s values with others) were not. Finally, it is necessary to extend the analysis of interaction in the future by taking into account the conflicts that arise between the values of the organization and the volunteers.

Key Words : Legitimate peripheral participation, volunteer, organizational socialization, role, quantitative content analysis